

Selective stripping operation based on Doppler ultrasonic findings for primary varicose veins of the lower extremities

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2014-10-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小谷野, 憲一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/1325

学位論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

学位記番号	医博論第 48号	学位授与年月日	昭和63年 6月24日
氏名	小谷野 憲一		
論文題目	Selective stripping operation based on Doppler ultrasonic findings for primary varicose veins of the lower extremities (超音波ドプラ血流計検査所見に基づいた下肢一次性静脈瘤に対する選択的ストリッピング手術)		

Selective stripping operation based on Doppler ultrasonic findings for primary varicose veins of the lower extremities
(超音波ドプラ血流計検査所見に基づいた下肢一次性静脈瘤に対する選択的ストリッピング手術)

論文の内容の要旨

208例(337肢)の下肢一次性静脈瘤に対し、超音波ドプラ血流計を用いて腓腹部圧迫法により大小伏在静脈内の逆流の有無を検索した。その結果、逆流の広がり方によって大伏在静脈瘤は5型(type I-V)に、小伏在静脈瘤は4型(type I-IV)にそれぞれ分類された。大伏在静脈瘤309肢のうち205肢(66.3%)では、鼠径部から足関節部までの大伏在静脈全長にわたって逆流がみられた(大伏在静脈瘤 type I)。同様に小伏在静脈の全長にわたって逆流のある小伏在静脈瘤 type Iは70肢中37肢(52.9%)に過ぎなかった。その他の肢では大小伏在静脈の一部の区間に限って逆流がみられた。これらのドプラ検査所見に基づき、大伏在静脈瘤 type II-V及び小伏在静脈瘤 type II-IVに対して、逆流の見られる部分のみを選択的に切除する selective stripping 手術を施行した(80肢、SE群)。一方、大小伏在静脈の全長にわたって逆流のある type Iでは、大小伏在静脈全長をストリッピングする従来の standard stripping 手術を施行した(189肢、ST群)。これらSE、ST二群間において術後成績を比較し、selective stripping 手術の妥当性につき検討した。

プレチスモグラフィによる逆流量の測定では、術前みられた異常に増大した逆流量が、術後にはSE群・ST群ともに正常域まで改善されていた。また術後平均3.2年の遠隔調査による患者の自覚覚症状でも、SE群ではST群と同様に良好な結果であり、satisfactoryとgoodを合わせて97.1%に達した。術後遠隔期における静脈瘤の再出現がSE群の12.5%、ST群の10.6%にみられたが、大小伏在静脈を選択的に残したことによる再発例は1例も認められなかった。さらにSE群では、standard stripping 手術の最大の合併症である神経損傷が大幅に減少し、本術式が従来の手術法に比して無駄を省いた合理的な術式であることが実証された。

論文審査の結果の要旨

静脈瘤の術前検査として、通常Brodie Trendelenburgをはじめとする各種の駆血帯テストや静脈造影法などが行われているが、これらの検査法では実地臨床上、逆流を遮断すべき部位、切除すべき静脈瘤の範囲の決定に迷う場合が少なくない。申請者らはドプラ血流計を用いて、表在静脈にプローブをあて腓腹部あるいは足部を圧迫すると、静脈瘤肢では、圧迫解除とともに末梢方向に向かう血流、すなわち、「逆流」が明瞭に検出されることを示し、大伏在静脈瘤を本幹内での逆流の広がり方によって5型(type-I~V)に、小伏在静脈瘤を同様に4型(type-I~IV)に分類した。

鼠径部から足関節部までの大伏在静脈全長にわたって逆流がみられた大伏在静脈瘤(type-I)は大伏在静脈瘤309肢のうち205肢(66.3%)であり、小伏在静脈の全長にわたって逆流のみられる小伏在静脈瘤(type-I)は70肢中37肢(52.9%)に過ぎず、その他の肢では大小伏在静脈の一部の区間に限って逆流がみられたと報告している。

さらに申請者らはこの検査結果をもとに従来の手術法を改良し、いわゆる selective stripping 手術を立案した。すなわち、逆流の認められない部分については、ストリッピングあるいは切除をせず、無用の侵襲はさける方法である。本法は従来の無選択的に全長ストリッピングを施行する標準手術に比べ、術後の静脈機能、遠隔成績に問題のないことを確認した。さらに本法では無選択的ストリッピング手術の主要な合併症である知覚神経損傷を大幅に減少させることができ、新しい静脈瘤の手術法として高く評価されるべきものと思われた。

なお、この研究に対して審査委員から次のような質疑がなされた。

1. 大伏在静脈瘤、小伏在静脈瘤の分類の独創性について
2. 大伏在静脈瘤の誘因について
3. 静脈弁不全の病因について
4. 大伏在静脈瘤の type と生活様式・性別との関連性について
5. 大伏在静脈瘤の selective stripping 手術の手技について
6. stripping 手術後に静脈還流の障害は残らないか
7. 大伏在静脈瘤の stripping 手術で大伏在静脈を除去した場合、将来冠動脈疾患の手術（冠動脈再建術）に支障はないか

これらの質問に対し申請者はおおむね適切な回答を行った。

以上の審査の結果、本審査委員会は、本論文が学位授与に値する十分な内容を備えているものと全員一致で判定した。

論文審査担当者	主査	教授	山崎	昇			
	副査	教授	神田	洋三	副査	教授	白澤春之
	副査	教授	高田	明和	副査	助教授	馬場正三